OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山形市方言の丁寧語ス
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2001, 3, p. 49-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第3号（2001年3月）49-60

山形市方言の丁寧語ス

渋谷　勝己

【キーワード】山形市方言、ス、丁寧語、心理的距離、ネットワーク

【要旨】

本稿では、山形市方言の丁寧語スについて、その記述を試みた。その特徴は、次のようにまとめることができる。

(a) スは、山形市方言では、伝達のモダリティ形式に後接する。

(b) いずれの文タイプにも用いられる汎用形式である。

(c-1) 壮年層・高年層は、言語行動の種類に応じて変化することのある聞き手との心理的距離を、その場その場で測定しながらスを運用している。

(c-2) 一方高校生は、「疎」そして／あるいは「目上」の聞き手に対するとき、その聞き手との、質・量両面にわたる接触度によって分類される以下のような社会的ネットワークのありかたに応じて、比較的固定されたかたちでスを使用する。

緊密なネットワーク部にある聞き手　：　ス使用

中程度のネットワーク部にある聞き手：　ス、デス・マスいずれも不使用

ネットワーク周辺部にある聞き手　　：　デス・マス使用

(d) 幼児に対して用いるような拡張用法はない。

1. はじめに

本稿は、山形市方言の丁寧語形式スについて記述するものである*。

はじめに、山形市方言の敬語形式群を整理しておこう。次のようなものがある（本稿では、通読の便を考えて、焦点となる形式のみ、カタカナで方言形を記す。ただし、語中の濁音化の表記などは正確でない場合がある。）

(a) まず聞き手目当ての敬語形式には、本稿で取り上げる丁寧語のスがある。

(1) それはよかったなッス

(2) あの人はその会に来たっケカッス？（ケは報告、カは疑問）

スは無活用語であり、直前に促音ッを伴う。スーと長音化することもあるが、直前に促音ッを伴うことにはかわりがない。

(b) 一方、素材敬語には、次のようなものがある。

(b-1) 命令形のシャイ

(3) アガラッシャイ

(4) 読マッシャイ

(5) そろそろ寝ラッシャイ

(6) 書いてケラッシャイ（書いて下さい）

(b-2) 敬語動詞ゴザル（「行く」「来る」「いる」に対応）

(7) よくゴザタな

(b-1) の命令形シャイは、基本形やタ形で平叙文のなかで使われることはない。

(8) ＊あの人、毎朝本読マッシャル

(9) ＊先生はもう寝ラッシャッタ

(10) ＊先生は推薦状を書いてケラッシャッタ（「書いて下さった」の意で）

敬語形式のなかには、共通語のナサイのように命令形でのみ使われるものがあるが、これもその例である。

なお、素材敬語であるシャイと丁寧語であるスは共起する。

(11) アガラッシャイッス（おあがりください）

(12) 読マッシャイッス（お読みください）

以上述べたように、山形市方言では、敬語形式（とくに素材敬語形式）はあまり分化していない。美化語もオヅゲ（みそ汁）など慣用的なものを除けばほとんど使われない。このことは、山形市が、伝統的に、階層分化の少ない農村社会であったこととも関係があろう。

しかし一方では、敬語形式を補うものとして、いくつかの待遇表現形式が用意されている。次のようなものである。

(c) 文末モーラの長音化

(13) a （教師に向かって）＃先生、あした来るカ？

b （同）先生、あした来るカー？

この長音化は、共通語でも、

(14) a 確か君、前にそんなこと言ってたよね

b 確か君、前にそんなこと言ってたよねー

のように、聞き手に何らかの配慮を示すために使われる方法ではあるが、山形市方言では、通常スが使えない、あるいは使うことが任意である聞き手に向かって、聞き手への遠慮（とくにネガティブ・ポライトネス）、共鳴等、話し手の「はっきりと言い切ってしまえない」「ひっかかりのある」気持ち、あるいは「余韻のある」「あとをひく」ような感情をアイコニックに示すために、さかんに使われるものである。なお、

(15) それはよかったなッスー

のように、文末の長音化はスと共起しても使われるので、互いにパラダイムを構成するものではない。

(d) 推量の「ベ」（＋カ）

(16)（生徒が先生に対して）

a　先生、あした来るベガ

b　??先生、あした来るベガッス

c　＊先生、あした来るだろうか（共通語）

d　先生、あした｛??来る／いらっしゃる｝でしょうか（共通語）

推量の「ベ」も、(16a) のように、(Yes-No 疑問文の場合には義務的に、WH 疑問文の場合（(59c) の例参照）には随意的に）疑問のカと共起して、聞き手目当ての丁寧さを表すのに援用されることが多い。この点も、共通語の「でしょうか」と似ているが（森山 1992：72、安達 1999：128 注 12；189 など参照）、山形市方言の場合、(16b) のように、丁寧語のスを用いずに、「ベ」単独で丁寧さを表すところが特徴的である。スを付加すると多少不自然になることから、独り言として疑念を表出しているように見せかけつつ、実際は相手に聞こえるようにする、といった語用論的な方略が、その起源であろう。

(e) 気配りの格率

また山形市方言の別の特徴として、聞き手にメリットがある場合には、相手が客であっても、親しい人であれば、

(17) ごはんクテンゲ（食べていけ）

のように、命令形ですすめることができる。同様に、子供に向かって母親が、使役形を単独で使って、

(18) 今晩うまいものをカシェッカラナ（食わせるからな＝食べさせてあげるからね）

のように言うこともできる。

以上、(c) から (e) にあげた項目のいずれも、待遇表現あるいはポライトネス全体の記述のなかではどこかに位置づけなければならない事象であるが、本稿では、記述の対象を丁寧語のスに限定することにする。

2. 記述の方法

本稿のデータは、壮年層・高年層の場合も含め、すべて筆者の内省による（この方法については§5 で検討する）。筆者は、1959 年山形市生まれ。言語形成期を含め、18 歳までを当地ですごしたあと、24 歳まで東京に居住し、一年間の海外生活をはさんで現在まで大阪府に住んでいる。山形市には、現在も、二・三年に一度帰省することがある。

待遇表現については、(社会言語学的な)方言研究では一般に調査によってデータを集め、そこから体系や属性によるバリエーションを抽出するという方法をとることが多い。しかし、共通語の敬語研究に見るように、特定の敬語形式について、内省によってその意味・用法を記述することももちろん可能である。本稿では後者の方法を採用する。

スを使いはじめる時期は、男性の場合、多くは小学校高学年、あるいは中学生になって上級生との間に序列を意識するようになったときのことであるが（女性は、学生の間はス

はほとんど使わずに、上級生にはデス・マスを使うようである)、日常生活のなかでは幼いときからよく耳にする形式である。本稿では、§3 で分布上の性格をまとめたあと、スの運用上の特徴について、筆者のまわりで、当時のとくに壮年層・高年層が使っていたスの特徴(§4.1)と、筆者自身が高校生のときに使用していたスの特徴(§4.2)の二つにわけて、記述を進めることにする。

なお、山形市方言の文法事象については、二十数年間にわたる外部での生活を隔てて筆者には内省しにくくなっているものもあるが、スに関しては、使用頻度と関連してか、そのようなことはない。

3. 分布

3.1. 文のなかでの位置

スは、次のように、文末に用いられることが多いが(以下、「A:、B:」で示す例は会話例。「A、B」はそれぞれの話し手を示す)、

(19) A:いつ行くのヤ
　　B:あしただッス

間投助詞(本稿では、文末以外の文節末に現れるものに限定する)として文節末に付加して、文の内部の切れ目ごとに聞き手目当ての丁寧さを表現することも多い。これは、共通語のスが文末にしか立たないのと違っている。

(20) あしたヨッス、みんなでヨッス、行くんだけれど(ヨ)ッス...

ただし、次の例に見るように、文節末ではス単独では用いられず、(20)のように、前接する間投助詞ヨ(やナ)を必要とする[1)]。

(21) *あしたッス、みんなでッス、行くんだけれどッス...

ちなみに(20)の場合、山形市方言には間投助詞としてのネがないために、ヨを使ったからといって待遇的にマイナスになるということはない。ヨは待遇的に中立であるので、丁寧語スと共起することには何ら問題はない。

3.2. 文末詞連鎖のなかでの位置

次に、文末詞承接のなかでのスの位置を確認しておこう。文末詞スと他の文末詞との位置関係は、次の通りである。

(22)(場所を指示して)どうだッス? そこにあるベ+ッス?(ベは推量)
(23) ちゃんと行ったド+ッス(ドは伝聞)
(24) おたくの息子、結婚したガ+ッス+ハー(ガは疑問、ハは不本意)
(25) お宅の息子、よく勉強するネ+ッス

これをまとめれば、スは、

(26) 判断のモダリティ+伝達のモダリティ+ス+ハ

といった位置において用いられると一般化できる。なお、上で「不本意」を表すとしたハについては、渋谷（1999）参照。そこではあわせて、かつては、ハ＋スの順序で用いられた可能性があることも述べた。

ちなみに、東京語で若い男性に用いられるスは、伝達のモダリティ形式の前にくるのが普通である。

(27) あしたは日曜っすよ

(28) 先輩は元気っすね

3.3. 文タイプとの共起

文末詞スは、次のように、すべての文タイプと共起する、汎用的な形式である。

(29) うちの息子はまだ学生だッス（平叙文）

(30) 結局だれ行ったんだッス？（WH 疑問文）

(31) あした行くかッス？（Yes-No 疑問文）

(32) 早く来てケラッシャイッス（来て下さい＋ス。命令文）

(33) 早く来てケロッス（来てくれ＋ス。命令文：高校の先輩などに）

4. 運用上の特徴

本節では、スの運用上の特徴について、壮年層・高年層の場合（§4.1）と、高校生の言語生活のなかで用いられる場合（§4.2）とにわけて、筆者の内省・経験（記憶）をもとに記述する。この二つの場合にわけるのは、スが、両者で、若干違った使われ方をするからである（ただし上記§3で述べた構文的な性格については異なるところがない）。

4.1. 壮年層・高年層

壮年層・高年層の、とくに男性が使うスには、以下のような特徴がある（女性のなかには、以下の男性がスを使う場面で、デス・マスを使う、あるいはデス・マスもスも使わないケースがある。本稿はスの用法を記述しているので、その詳細は省く）。

4.1.1. 形式面での特徴

形式的には、スはスーと伸びることがある。これは、壮年層・高年層のスの特徴である。§1も参照。

4.1.2. 対者の特徴

対話のなかでは、山形市方言の丁寧語スを用いる相手は、目上であれ、疎の相手であれ、基本的に、心理的な距離を感じる相手であるといってよい。たとえば、初対面の同年配の人や、顔見知りの子供の教師などがその典型である。

(34)（初対面の人に）どこの出身だッス？

(35)（息子の担任に）勝己はこの成績で大阪大学に入れるかッス？

また、筆者の身の回りから例を採れば、外回りの業者が親しい顧客のところに出掛けて話すときなども、売り手と買い手という関係を反映して、とくに会話の冒頭部分でスを使うことが多い（次の（c）も参照）。

(36) 最近、どうだッス？ 景気いいかッス？

一方、相手が年長者でも、親しい人であれば、スを使うことはない。町内の話し合いの席などの公の場でも、顔見知りの聞き手が多ければ、スを使うことはないようである。

(37)（町内の話し合いで）今年の盆踊り大会の日は、去年と同じでいいか？

4.1.3. 言語行動面での特徴

普段スを使わない親しい相手でも、あいさつや会話の冒頭部における儀式的な場面では、スが多く使われる。

(38) A：いい天気だねッス
　　B：そうだねッス

(39) A：どこにいくのヤッスー（ヤは文末詞、未分析）
　　B：東京だッスー

(40) A：こっちに上ガラッシャイッス
　　B：どうもッスー

同様に、普段はスを使わない相手でも、依頼や感謝、謝罪、断りなど、話の内容に話し手が遠慮を感じるようなことを含む場合には、その気持ちと連動して相手との間に心理的な距離が生じるために、スが用いられやすくなる。

(41) A：あしたまで作ってくれないかッスー（話し手メリット依頼）
　　B：{#いいよッス/ いいよ}

(42) こんなにいただいて、わるいナッスー（わるいねー、感謝）

(43) A：あした手伝ってくれないかッスー？（話し手メリット依頼）
　　B：わるいけど、あした東京に行くんだッスー（断り）

これらの文を、次のような、単純に事実を述べ立てる文や、話し手の意向を述べる例と比較されたい。

(44) #あしたは蔵王に雪が降るみたいだッス（情報伝達文）

(45) A：何の準備をしているの？
　　B：#あしたから東京に行くんだッス（意向文）

ちなみに、(44) (45) と同じくスが使われないということでは、ズのような、情報や行為を聞き手にインポーズするような形式（渋谷 2000）などとも共起しない。この点、共通語のデス・マスと異なる。

(46) a ＊ちゃんとあした行くズッス

b ちゃんとあした行きますって（共通語）

(47)（町内の清掃に参加したかを詰問されて、言い返す場合）

a ??うちは、ちゃんと参加したヨッス

b うちは、ちゃんと参加しましたよ（共通語）

(48) a ＊早く起きろッス（命令文）

b 早く起きなさい（共通語）

ただし（48）の命令文に関しては、テケロ（てくれ）形やテケラッシャイ（てください）形にして話し手が恩恵を受ける（聞き手との心理的距離が生じる）ことを明示すれば、命令形にスが後接することがある。

(49) a 早く起きてケロッス（高校生が先輩に言う場合に適切）

b 早く起きてケラッシャイッス（高校生だけでなく、壮年層・高年層でも適切）

4.1.4. 拡張用法の欠如

なお、山形市方言のスには、共通語にあるような、年少者に向けた拡張用法はない。小学校高学年等も含め、スはあくまでも言語的成人社会のなかで使われることばである。

(d-1) 祖母から幼い孫へ

(50) a ＃明日は買い物に行くよッス

b 明日はデパートに行きますよ（共通語）

(d-2) 幼児に対して

(51) a ＃実咲ちゃん、よくできたなッス

b 実咲ちゃん、よくできまちたね（共通語）

4.1.5. 参考：デス・マスの使用

ちなみに、デスとマスに関しては、壮年層・高年層の構成する方言社会では、ほとんど使われることがない。次の 4.2 で述べる高校生の場合とも違って、デパートや普段あまり出入りしない店（旅行代理店など）でも、デス・マスを使うことはない。

(52) A（客） ：この服ナンボダ？

B（店員）：5,000 円です

(53) A（客） ：東京まで 1 枚頼マレッカ？（可能）

B（店員）：はい、少々お待ちください

唯一、よく耳にするのは、電話の開始時において、聞き手がまだ特定されない段階で用いられる次のような例である。

(54) ハイ、渋谷｛デス／＃ダッス｝

(55) A：（間違い電話で）渋谷さんですか？

B：いえ、{違イマス／#ンネッス}

次の例と比較されたい。

(56)（電話の終了時の、電話内容の確認）

A：もう一度お名前をおっしゃっていただけますか？

B：渋谷だッス

以上、壮年層・高年層のスの用法をまとめれば、次のようになる。

表1　壮年層・高年層のスの特徴

形式的特徴	スは伸びることも伸びないこともある。
対者の特徴	基本的に、心理的な距離を感じる相手に対して使用。
	親しい人であれば、年長者、公の場面でも不使用。
言語行動的特徴	あいさつや会話の冒頭部における儀式的な場面で使用。
	依頼や感謝、謝罪、断りなど、話の内容が話し手が遠慮を感じるものである場合に使用。

4.2. 高校生の場合

次に、高校生の場合のスの用法を見てみることにしよう。

東北地方の高校、とくに男子校（東北地方では、公立高校が男女でわかれているところが多い）は、「質実剛健」をモットーにかかげるところが多い。そのような社会では、潜在的な威信（covert prestige）が前面に出るために、共通語や東京語は「軟弱さ」のマーカとなることがある。もちろんそのなかには、デスやマスも含まれる。筆者の在籍した高校（ほぼ男子校、女子は1学年に10数名在籍）も、その例外ではなかった。以下にあげるのは、筆者の属した高校社会のなかでの、スの特徴である。次のようなことがあげられる。

4.2.1. 形式的特徴

形式的には、スは長音化することがない。これは、若年層のスの特徴である。

4.2.2. 対者の特徴

スを使用するのは、教師（男女・老若一般に）およびクラブの先輩など、質・量いずれの面においても日常的に緊密な接触を行っている人たち＝筆者の社会的ネットワークの中核を構成する人たちを聞き手としたときである。

(57)（教師に）今日の午後、質問しに行っていいかッス？

(58) 先輩：あした7時に出て来いよ

後輩：わかったッス

ただし教師には、スを使わないこともある。高校社会では、先輩後輩の関係のほうが、序列意識が明確だということであろう。もっとも教師に対しても、スを使わない場合に、丁寧さを全く表現しないというわけではない。たとえば推量の「ベ」（＋カ）（§1 (d)）を使

うといった別の方略を採用することによって丁寧さを表現するということがある。

(59) a　先生、今度いつ来るッス？
　　b　＃先生、今度いつ来る？
　　c　先生、今度いつ来るベ？
　　d　??先生、今度いつ来るベッス？

教師・先輩以外に、高校時代にスを使った相手はとくに思い浮かばない。教室内の発表や生徒会など、公の場での発言にはス、あるいはデス・マスが使われることもあるが、従属節だけを述べて主文を回避する、「ベ」を使うなどの方略が採られることもまた多い。

(60) こういうふうに思ウゲント。(思うけれど)

(61) こういうふうに書いたけれど、おかしいベガ

一方、高校時代の筆者の社会的ネットワークを構成する学校外の人物で、筆者にとっては「疎」あるいは「目上」といった関係にありながら、筆者がスを使わなかった相手は、次のような人たちである（以下の会話例のうち、カッコ内は筆者の頭のなかにある具体的な属性。注記は、例にあげた会話の話し手・筆者との親疎関係・年齢・性、の順。下線は筆者の発話。すべて作例である。以下同様)。

・出入りの業者（A：顔見知り・壮年・男）

(60) A：夏休みになったか？
　　B：<u>まだだ</u>

・近所の人（A：顔見知り・壮年・女）

(61) A：修学旅行、どこに行くのヤ？
　　B：<u>東京</u>

・大型書店の店員（B：疎・若年・女）

(62) A：<u>この本ナンボだ（ベ）？</u>（「ベ」による丁寧表現）
　　B：300円です

・個人経営書店の店員（B：疎・壮年・女）

(63) A：<u>この本ナンボだ？</u>
　　B：300円

いずれも、複数回の接触はあるものの、そう頻繁に接触するというわけではない人たちで、ネットワークの緊密さという点では、中程度のレベルにある人たちだと言える。

4.2.3. 言語行動面での特徴

壮年層・高年層に見られたような、言語行動の種類がスの使用・不使用を左右するといったことは、高校生では観察できない。前項でまとめた対者の条件のほうが、強く働くようである。

4.2.4. 拡張用法の欠如

壮年層・高年層と同じく、年少者に向けた拡張用法はない。

4.2.5. 参考：デス・マスの使用

以下の相手 ── 接触が稀であるという点で、ネットワークの最も外側の人物 ── に対しては、デス・マス（共通語）を使うことがあった。この場合、スは使わない。

・デパートの店員（B：疎・若年・女）

(64) A：これいくらですか？

B：3,000円です。

・旅行代理店の店員（疎・若年・女）

(65) 22日、東京まで指定1枚お願いします。

もっとも、ネットワークの最も外という点では、警察や駅の事務員も同じであるが、これらの人物にデス・マスを使うことはない。

・警察・駅の事務員（B：疎・壮年・男）

(66) A：左沢線は何番線だー？（長音化による丁寧表現）

B：5番線

(67) A：左沢はどっちの道を行ったらいいべ？（「べ」による丁寧表現）

B：左に曲がってまっすぐだ

これは、相手が共通語（デス・マス）を使わないという予想が話し手にあるためである。

電話の冒頭でデス・マスを使うことは壮年層・高年層の場合と同じであるが、これを、上と同じようにネットワークという枠のなかで特徴づけてみれば、まだネットワーク上の特定の場所に位置づけられていない相手に対しては、デス・マスを使うということになる。

以上をまとめると、筆者を例としたときの高校生の、「疎」そして／あるいは「目上」に対する丁寧語使用の特徴は、次のようになる。

表2　高校生の丁寧語の特徴

形式的特徴	スは伸びない。
対者の特徴	教師や先輩など、緊密な社会的ネットワークを結んでいる相手にスを使用。 ただし教師には、推量の「べ」を使うなどの方略が採用されることあり。
	ネットワークの最も周辺部、またはその外部の人物にはデス・マスを使用。 ただし相手がデス・マスを使うことはないと話し手が思っている場合には、デス・マス不使用。
	中程度のネットワークの人物に対しては、スもデス・マスも不使用。
言語行動的特徴	とくになし。

5. まとめ

以上、本稿では、山形市方言の丁寧語スの用法を、壮年層・高年層と高校生の場合にわけて、記述することを試みた。その用法上の主な違いは、次のようにまとめることができ

る。

(a) 壮年層・高年層は、言語行動の種類に応じて変化することのある聞き手との心理的距離を、その場その場で測定しながらスを運用している。

(b) 高校生は、「疎」そして／あるいは「目上」の聞き手に対するとき、その聞き手との、質・量両面にわたる接触度によって分類される以下のような社会的ネットワークのありかたに応じて、比較的固定されたかたちでスを使用する。

緊密なネットワーク部にある聞き手　：　ス使用
中程度のネットワーク部にある聞き手：　ス、デス・マスいずれも不使用
ネットワーク周辺部にある聞き手　　：　デス・マス使用

高校生の場合には、言語行動の種類などによって左右されることはない。

ところで本稿では、先に§2 で述べたように、ひとつの試みとして、方言敬語形式の用法を、かつて筆者が経験したことを回想することによって記述するという方法を採用した。この方法は、敬語形式（あるいは待遇表現一般）に対する社会言語学的なアプローチとは異なり、むしろ文法研究の採る内省と同じ種類のものといってよい。文法研究との違いは、その記述に、適格性判断だけではなく、聞き手や場面と関連づけた、適切性の判断も要求されるという点にある。

また、適格性判断や適切性判断ということでは、本稿では、壮年層・高年層のスについて分析する際にも、その方法を採用した（§4.1）。ただしこの場合の適格性判断・適切性判断は、壮年層・高年層インフォーマントのそれではなく、壮年層・高年層であればこう言うだろう、あるいはこうは言わないだろうという、筆者のなかに18年にわたって構築された、スをめぐるスキーマやスクリプトに相当するものを活用したものである。

ここで、次のような疑問が生じるであろう。このような方法は、そもそも記述のありかたとして妥当なものであるのか。

小説家やシナリオライターが登場人物によってことばを使い分けることに典型的に見るように、そもそも一人の話し手・書き手は、そのコミュニケーション能力の一部として、自分がもつ属性以外の属性をもつ多様な人物のことばを理解し、また模倣、産出する能力（社会言語能力の一）をもっている。その産出されたことばは、実態を忠実に写し取ったものもあれば、（とくに身近に接することがないことばの場合、）金水（2000）のいう役割語や社会言語学でいうステレオタイプのように、実態と乖離しているものもある。

方言については、あるいは限定して本稿で取り上げたスのように当該方言社会で高い頻度をもって用いられる形式については、筆者自身が使用する使用語[2]としての内省はもちろん、壮年層・高年層の使用するスを理解語として、その適格性や適切性を内省することができる、というのが、本稿の立場であった。

なお、この、スキーマと実態との異同ということでは、文法記述における内省も、実は同じ種類の問題をかかえていると言ってよい。内省が検索するもの（のひとつ）は、内省

者が、さまざまな発話（―自分の過去の発話であることも、他者の発話であることもあろう―）を耳にすることによって構築してきたスキーマであるということもできるからである。

最近の方言研究界は、社会言語学的な方法を採り、一定の調査文を使って複数のインフォーマントに面接調査を行うことが多いが、本稿のような、内省を用いた記述研究も、社会言語学的な調査に先立って、もっと行われる必要があると考える。そのような試みのなかで、上で提起した個人のコミュニケーション能力とはなにかという問題も、あらためて問い直される必要があろう。

【注】

* 本稿は、平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(1)、研究課題番号11480052）「現代日本語の音声・語彙・意味・文法・談話における変異と日本語教育」（研究代表者、日比谷潤子）によるものである。

1) ただし、ケレド節やカラ節など、南（1974）のいうC類従属節末では、ス単独使用も容認されやすい。

2) もちろん移住による母方言の摩滅という問題も、あわせて考慮する必要がある。

【参考文献】

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

金水敏（2000）「役割語探求の提案」佐藤喜代治編『国語論究第8集 国語史の新視点』明治書院

渋谷勝己（1999）「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1

――――（2000）「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

森山卓郎（1992）「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101

しぶや　かつみ（大阪大学大学院）

sbj@let.osaka-u.ac.jp